



2024年1月1日16時10分ごろ、石川県能登地方で最大震度7の地震が発生しました。体験したことのない大きな揺れに、みなさんそれぞれが怖い思いをしたかと思います。当日、お仕事をしていました方は不安の中で通常業務をこなし、患者さん、利用者さんを守っていました。

さて、そんな中、当センターからも厚生労働省DMAT事務局からの依頼を受け、2隊のDMAT(災害派遣医療チーム)を派遣しました。(2024年1月12日時点)

今後も派遣要請があり次第、順次派遣を予定しています。お忙しい中、各隊のDrより体験談をいただきました。

第1隊 派遣職員：橋本Dr(脳外科)、堀Ns(HP 内視鏡)、藤井Ns(CL 泌尿器科)、岩永ロジ<sup>A)</sup>(CL PT)

派遣期間：2024年1月2～4日

活動内容：石川県立中央病院 活動拠点本部での業務及び能登地区からヘリコプターで搬送された患者を金沢市内の病院へ搬送

1月1日16時過ぎ能登大震災直後から災害救援活動は始まりました。

災害の基本理念は自助から始まり、公助、そして共助まで迅速につなぐ必要があります。<sup>(1)</sup>

まずは自助。地震発生時は、テーブルの下に隠れながら、半パニック状態にある小学生の息子二人に我が家は安全であることを言い聞かせ、安心させ、近所に住む義父母の安否確認を行いました。それから、息子らと防災グッズの中身と食料備蓄品が十分あることを確認しました。

次は公助です。私はこの宮上第二自治会役員のため、役員LINEから安否確認・近所の安全確認が入ったのですが、地区内の安全は会長・副会長が見回って確認をしています。

そして共助、私の場合は入院患者の安全確保とDMAT活動となります。発災直後にセンターDMATグループLINEで、事務長と松田ロジ(HP ME)から病院到着の知らせや、勤務中のDMAT隊員からの院内の様子(エレベーターが止まった事、病棟の乾燥機などが転倒した事)など細かい情報を確認しました。高橋ロジ(HP RT)からは放射線機器の安全作動確認が報告されています。発災から25分後に病院の被害状況を把握し、EMIS(広域災害救急医療情報システム)に入力できました。

一方、DMAT事務局からの連絡はないですが、地震規模・震源場所から考え、DMAT隊として活動することを覚悟しました。家族は不安のようでしたが、早く被災地出動に賛同してもらえました。理事長の判断を仰ぎ、恩地副院長、事務長そして看護部長からDMAT隊員それぞれ派遣の許可を得、翌日から活動できるよう看護部長らによる隊員の調整を行いました。出動を覚悟してくれた隊員、そして諸事情から出動できない隊員の様々な思いが錯綜した選定だったようです。突然の要請による日程変更の連続で、ストレスfulの調整だったように思います。発災から2時間後には、出動隊員を選定。それと同時進行で、その日勤務ではなかった隊員達も病院に駆けつけ、21時頃まで院内の関係各所に協力いただき、

備品チェック(持参薬剤、感染対策物品、自分達の食料や水)を行いました。出動隊員の所属する部署には、いつ出動してもいいよう、日程調整をしてもらっています。私の場合も業務に穴をあけるため、宇野先生、院長そして副院長に不在になる旨伝え、協力をいただきました。

翌日1月2日9:45、残りの準備をしながら待機している最中、厚生労働省DMAT事務局より派遣要請があり、福井県内DMAT 7隊全てが、石川県立中央病院(以下、県中)活動拠点本部に参集され、本部活動の支援をするとの決定情報が送られてきました。13:00に出発準備を整え、後方支援していただいたDMAT隊員に見送られ、福井総合病院として初めて震災DMAT活動のスタートです。



第1隊 出発前、準備をしたスタッフと

用語の説明：

A)ロジ：ロジスティクス

医療活動に関わる通信、移動手段、医薬品、生活手段等を確保することをいい、DMAT活動に必要な連絡、調整、情報収集の業務等も行います。



さて、現地での活動内容は、というと、本部活動支援とは聞いているものの具体的な活動内容を事前に分かるはずもなく、患者搬送、医療ニーズなどの情報収集そして急患対応する病院支援などの臨機応変な対応が求められます。病院間の患者搬送は災害時、DMAT業務となります。搬送された患者状態を把握し、『いかにして奥能登の被災地区から被害の少ない金沢市内の病院に患者をより早く搬送し医療を提供するか』のトライアージが重要です。(2)



第1隊 左から橋本Dr、藤井Ns、堀Ns、岩永PT

活動拠点本部の調整係と搬送係2班に分かれて活動



短時間の休憩  
キュウリとサラダチキンで  
エナジーチャージ



自衛隊のヘリコプターで搬送された患者を金沢駐屯地で引き継ぐ



県中に到着すると、本部のロジ業務と患者搬送業務の2班に分かれ活動する事となりました。

私は、疲労困憊の県中DMATに代わり、県中のハブ化を目的とした本部活動を展開する事に。被災地から患者を県中の管轄に出し、患者を各医療機関に振り分け、医療の提供を行う業務です。県庁レベルの会議、院内会議、リーダー会議、金沢市内の中央・南地区の災害拠点病院の病院長会議、と、幾つも行われる会議の会議録作成と本部活動のクロノロ作成<sup>B)</sup>が主体でしたが、目まぐるしく変わる現場の情勢や医療ニーズの把握とそれに対する対応策を計画する連続。日々の天候悪化や道路状況で搬送経路を大幅に変更しつつ、患者搬送・搬出業務とバランスをとり、展開していくことはまさに戦場そのもの。災害訓練時でも何度か統括業務をしたことはありましたが、その時でさえ課題の多さにパニックに陥っていたのに、ぶっつけ本番の今回はもちろん仕事量の多さに泡を吹いていました。しかし、県中内を見渡せば、福井県内のDMATはワンチームとなり、効率よく落ち着いた活動をとっています。どうも、福井県内内のCovid19入院コーディネートセンターでの業務を通じて、みなほぼ顔見知りとなり、苦難を乗り越えてきた仲間となっていたようです。役割分担もスムーズで協力体制も円滑。福井県立病院DMATチームは、肝となる患者トライアージの搬出業務を行いながら、情報共有ツールを利用した患者情報のデータ入力。患者間違いをなくするための業務の円滑化を図り、どこでも閲覧可能としてくれます。

もう1班は本部のロジ活動と金沢市内の病院への患者搬送業務です。1日目は暗くなった金沢市内を患者搬送し、2日目は、金沢駐屯地から巨大な自衛隊のヘリコプターで搬送された患者を各病院へ車両搬送したり。7:00から21:00までそれぞれが活動をこなし、それ以降はオンコール体制で金沢市内の宿泊施設で待機状態。

用語の説明：

B)クロノロ：クロノロジー(Chronology)

情報を時系列に並べたもの。情報を時系列に沿ってホワイトボードなどに書き出し、災害情報共有し整理する事。

以上、3日間の活動であったものの、活動拠点本部の重要な役割を肌で感じた次第です。クロノロのPC入力という激務をこなした堀Ns、事前の物品整理から県中ロジとも連携していた藤井Ns、そして救急車両の運転や全体会議のクロノロ作成活動を精力的に行った岩永ロジ本当にお疲れ様でした。

今回、災害活動に活かせる貴重な体験をさせていただきました。このような体験ができたのも後方支援していただいたDMAT隊員並びにセンターの全面的なサポートあってのもの。感謝申し上げます。

現在、私の精神状態は、アドレナリンが出続けた救援活動の日々から平常心を取り戻そうと、クールダウンしています。次の出番が来るまでの充電中で、セルフメンタルヘルスチェックなども行いました。(3) 災害支援はまだ始まったばかりです。今後もできることを皆様とともにやっていく次第です。

最後に、この度、地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。1日も早く、平穏な生活が戻れますよう、お祈り申し上げます。

- 1)自治体の地域防災・危機管理のしくみ 鍵屋一 学陽書房
- 2)DMAT標準テキスト 日本集団災害医学会 へるす出版
- 3)DMAT/DPAT隊員のメンタルヘルスチェックに関する研究 東京大学

第2隊 派遣職員：上藤Dr(外科)、有田Ns(HP 7A)、吉田Ns(HP 6A)、高橋ロジ(HP RT)

派遣期間：2024年1月5~7日

活動内容：被災地へ入ると併せて支援物資を運搬

公立能登総合病院から市立輪島病院へ移動し、患者搬送調整業務

市立輪島病院から帰院の際、金沢市内へ患者搬送

1月5日早朝5:00、当院を出発、余震が幾度と続くなか、1月7日まで市立輪島病院(以下、輪島病院)でDMAT活動をさせていただきました。

今回の地震では地割れ、倒木等で通行可能道路が少なく、穴水からは特に悪路でしたが、吉田Nsのすばらしい運転で無事輪島に到着することができました。



第2隊

左から吉田Ns、上藤Dr、有田Ns、高橋RT

輪島病院では電気の確保はされているものの、病院配管の損傷で今後、長期にわたり水の確保が困難との事で、病院の機能維持は非常に難しい状態です。しかし、地域の患者さんの受け入れを行う中核病院として診療の継続が必要であり、病院の負荷を減らすために入院患者さんなるべく被災地外に搬出していくという方針でDMATの活動要請を受けました。

他にもDPAT、日赤救護班、AMAT(全日本病院支援班)、災害支援ナース、自衛隊や消防隊など全国各地の多数のチームが活動していました。



通常1時間30分で行ける能登総合病院から輪島病院間を5時間かけて移動  
県中から移動の際は、各病院へ物資を運搬



今回の活動の中で最もつらかったことは手を洗えなかったことでした。輪島市内では道路のマンホールがタケノコのように隆起しており、上下水道ともほぼ機能しておらず、手が洗えません。トイレトレーラーも1台病院に設置されていましたが、手洗い分までは水が確保できず手は除菌ティッシュで拭う毎日でした。ただ、電気が確保されていたため電子レンジ、電気ポットが使用でき、なんとといっても輪島病院内が暖かいことが本当に幸いでした。また、被災地では電波の悪いところも多数あり、道路状況や活動をする上で必要な情報がなかなか得られないことが多々ありました。水、電気、情報と今までの日常ではあることが当たり前のもばかりですが、こんなに大切なものであると感じたことはありませんでした。

最大のミッションは最終日にやってきます。入院患者さんの搬送です。今回、スペースの関係で80歳代の患者さんの護送をしましたが、悪路の中を3時間移動するというのは、ご高齢の方には非常に負担がかかります。有田Nsがなだめながら、他隊員が雪と横風の中を交代で運転し、無事に石川県立中央病院へ搬送しました。非常に困難な状況下での患者さん、そして被災地で発災から無休で働いている病院関係者の方々のわずかながらでもお手伝いをすることができて良かったと思います。

そして、今回我々が活動できるように支えてくださったセンターの皆様へ感謝申し上げます。



地盤沈下によって隆起したマンホール



トイレトレーラー



道路状況マップを確認しての移動



病院受付ホールを利用した  
全体会議



数時間単位で変わる状況を逐一確認



なんとか予約できた宿泊施設はもちろん断水。シャワーもなく、1F大浴場に水になって溜まっていた温泉水を3Fの部屋まで運び、トイレの水として利用。

第3隊 派遣職員：白崎Dr(内科)、看護部長、中村Ns(HP 4A)、松田ロジ(HP ME)、事務長  
 派遣期間：2024年1月6日、1月9日  
 活動内容：福井空港から福井総合病院への患者搬送

1月6日当院から3隊目のDMATチームとして、白崎、増田看護部長、中村莉玖Ns、ME松田室長、酒井事務長の5人で福井空港に立ち上げられたSCU(staging Care Unit)での業務に当たりました。SCUとは広域搬送拠点臨時医療施設のごとで、地震や津波などの大規模災害が発生した時に、傷病者のトリアージ、初期診療を行った後、被災地外の災害拠点病院などに広域医療搬送を行うために設置された医療施設です。このSCUで状態が安定するように医療処置をしながら次々と搬送していきます。



左から中村Ns、白崎Dr、松田ME、看護部長、事務長



前日の時点では広域搬送の予定はないと連絡を受けていましたが、天候の関係で当日、突然石川県から福井県のDMAT調整本部に搬送依頼の連絡が入り、緊急出動しました。写真は福井空港に到着した航空自衛隊の大型輸送ヘリCH-47、通称チヌークです。

柳田温泉病院(能登町)に入院していた15人の患者さんが搬送され、県内各病院から駆け付けたDMAT隊員23人および救急隊員の方々と共に各病院への搬送業務に当たり、当院には2名搬送されました。いずれの患者さんも病状は安定していましたが、被災地で5日間過ごされた影響か、脱水症や感染症を併発していました。

1月9日にも市立輪島病院に入院中の患者さん30人が福井空港に搬送され、県内8病院で受け入れ、内4人を当院に搬送しました。広域搬送しないと命をつなげないほど石川県内は医療ひっ迫しており、家族の連絡先が分からないまま搬送された患者さんもおられました。とにか命をつなぐために活動しました。今回の能登半島地震に関するDMAT活動は、1月11日原稿執筆現在、北海道から中国四国地方まで広がっています。

地震大国と言われる日本ではマグニチュード5.5以上の地震が年1回以上発生しているそうですが、今回隣県で起こった大震災を経験して、改めて自然災害の恐ろしさを痛感し、平時からの備えが必要であると実感しました。新年早々先陣を切って出動した橋本Drチーム、第2陣として過酷な被災現場に乗り込んで支援に当たった上藤Drチーム、そして何より自ら被災しながら診療を続けた石川県内の医療従事者の皆様に敬意を表するとともに、被災した地域の方々が1日も早く平穏な日常生活に戻れることをお祈りする次第です。



**大型輸送ヘリコプターCH-47J：通称チヌークとは？**

航空基地間の幹線航空輸送を担う輸送ヘリコプターです。主要航空基地と点在しているレーダーサイト等へ必要器材などを運びます。乗員は乗組員5人+48人となっています。今回は、2段ベッドのように担架を3,4段重ねて、一度に15名を搬送。